

宣教師が運んだフランス —長崎・築地・横浜の「近代」—

西岡 亜紀*

はじめに

「泰平の眠りを覚ます上喜撰たつた四杯で夜も眠れず」(詠み人知らず)という狂歌にも有名なように、日本の「近代」の始まりは、しばしば蒸気機関船(通称黒船)の来訪に象徴される。確かに、黒船に乗って次々とやってきたペリー Matthew Calbraith Perry(1794-1858)に代表される軍人、ハリス Townsend Harris(1804-78)に代表される役人、グラバー Thomas Blake Glover(1838-1911)に代表される商人らが、19世紀末の日本に運んだ技術や文化は計り知れない。幕末の外国人(ともに来訪したアジア人も含めて)が持ち込んだ科学知は、日本の政治、経済、生活様式のあらゆる方面を画期的に変容させ、都市部を中心にまさに横浜絵の鮮やかさが伝えたような開化が始まった。そこに描かれた「佛國」「佛蘭西人」の華やかで洒落た先進文明国の様式が「フランスへの憧れ」の出発点であることは言うまでもない。

この黒船に乗っていた人々のなかには、キリスト教の宣教師もいた。居留地を地盤として教会を建て、布教のための出版を行い、慈善事業として孤児院や医院を開く。社会的弱者の救済に重点を置いていた彼らの活動は、華々しく登場していく西洋の科学知とは対照的な地味なものであった。しかし、草の根的にじわじわと、彼らのかかわる日本人の生活様式や精神を変え、現在の私たちはとくに疑わない教育・医療・福祉の分野における博愛的な人間観を開いていく。

いったい私たちはフランスの何に憧れてきた(憧れている)のであろうかと問うときに、この

宣教師がもたらした博愛的な人間観は、フランスへの「憧れ」を読み解く鍵として着目するに値するのではないか。それが、本稿のテーマである。

宣教師が運んだフランスとはどういったものだったのか。教会の歴史や人物伝のなかで個々に語られることの多い幕末・明治の日本における宣教師の活動⁽¹⁾について、いくつかの事例を照らし合せ、そこに共通する人間観を解明する。そしてそれを「フランスへの憧れ」を読み解く一つの視座として、本シンポジウムへの問題提起とする。

I. 幕末・明治のフランス人宣教師

幕末期のフランスのカトリック宣教師の日本への接近は、実は、1858年の日仏修好通商条約の締結(つまり開国)に先駆けて始まっていた。

17世紀にギヨーム・クールテ神父 Père Guillaume Courtet(1590-1637)が琉球で殉教した後は、フランスのカトリック宣教師は迫害を逃れて一時は日本を撤退した。ただし、パリ外国宣教会 Missions Etrangères de Paris は、密かに日本の開国を信じて、マカオや香港で再布教の好機をうかがっていた。その経緯から、1831年に同会がバチカンから朝鮮布教区として任命され、他のキリスト教会に先駆けて日本も含む極東の再宣教を委ねられた。1844年にフランス東洋艦隊が琉球に来航し日本との和親条約締結を打診した際に、テオドール=オグスタン・フォルカード神父 Père Théodore-Augustin Forcade(1816-85)が、清国人神学生とともに通訳官として同行、最初の日本接近を果たす。このときフランス東洋艦隊は、日本

* お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター客員研究員/東京経済大学特任講師

に要求をつきつけると、返事を受け取るために再訪すると告げ、琉球語を勉強させる名目でフォルカード神父ら通訳官を強引に残して出航、二名はその後、那覇の聖現寺（通称 天久寺）で幽閉生活を送りつつ琉球語を学んだ。ほぼ同様の経緯で、1855 年にも琉球語学習を名目に三人のパリ外国宣教会の宣教師が、香港経由で琉球に派遣される。ウジェーヌ＝エマニュエル・メルメ・カシオン神父 Père Eugène-Emmanuel Mermet Cachon (1828-89)、プリュダンス・セラファン＝バルテルミ・ジラル神父 Père Prudence Seraphin-Barthelemy Girard (1821-67)、ルイ＝テオドル・フュレ神父 Père Louis-Theodore Furet (1816-1900)である。むろん首里王府は受け入れを拒否したが、艦隊はまたも強引に三人を残して出航、彼らも聖現寺に滞在して日本語を学んだ⁽²⁾。

このように、パリ外国宣教会の宣教師は、開国に先だち、危険な日本やその近隣に潜伏し、日本語学習を進めながら日本上陸に備えた。1856 年の同会の報告書には、彼らがこの軟禁生活のなかで容易に日本語を話せるところまで語学を習得したことや、メルメ・カシオン神父が辞書と文法書の編纂にも着手して完成も近いといったことなども確認できる⁽³⁾。

こうした準備が基盤となって、1858 年に日仏修好通商条約が締結されるとまもなく、パリ外国宣教会の宣教師たちは次々と外交の人材として重用された⁽⁴⁾。また、条約締結によって五港（函館・横浜・新潟・神戸・長崎）と二市（東京・大阪）が諸外国に開かれてからは、外国人によるキリスト教の信仰や教会設立は許された。先に来日していた宣教師は、外国人居留地における教会（天主堂）の設立に着手しながら、仲間を呼び寄せた。

1862 年にはフュレ神父が、のちに長崎の潜伏キリシタンを発見しその宣教の中心となるベルナル＝タデ・プティジャン神父 Père Bernard-Thadée Petitjean (1829-84) を率いて横浜に入港、1868 年にはそのプティジャン司教 (1866 年に叙階) が、

のちに長崎の外海という寒村で政府による弾圧で貧困を極めていた日本人キリシタンの生活を一変させる画期的な慈善活動を行うことになるマルク＝マリ・ド・ロ神父 Père Marc-Marie de Rotz (1840-1914)、1872 年には修道女の来日の先駆けとなるサント・マチルド修道女 Mère Sainte Mathilde (1814-1911) ほかサン・モール会 Saint Maur の修道女を招く。そして 1877 年には、のちに築地宣教やミッション・スクール設立の基軸となるピエール・マリ・オズーフ司教 Evêque Pierre Marie Osouf (1829-1906) も招いた。

ここで着目すべきことは、彼らが来日したときの日本国内の状況である。周知のように、1867 年の大政奉還前後の政治は混乱を極めていた。国家や藩の方針をめぐって各地で起こる内紛に国土は荒れ、死者や負傷者や病者が出た。政権交代後は戊辰戦争・会津戦争といった大規模な内戦も起きる。当然、大量の孤児と生活困難者も出る。一方で、開港による外国人やキリスト教の勢力増大を危惧した政府は、キリスト教の禁制を強めながら、潜伏キリシタンへの弾圧も行った。とくに、1868 年以降の長崎の浦上信徒の大規模な流刑、「浦上四番崩れ」は過酷であった。結果的にはこの弾圧が欧米諸国の猛烈な抗議にあったことをきっかけに、日本政府は 1873 年に禁令撤廃を許容した。しかし、撤廃はむしろキリスト教や信者への警戒を強めしたので、依然として日本国内で宣教師の置かれた状況は穏やかではなかった⁽⁵⁾。

その渦中であって内戦や困窮にあえぐ多くの日本人や過酷な弾圧に遭う信徒の現状に、プティジャン司教らは心を痛めた。むろん、宣教師も含めた西洋列強の脅威が内戦を激化させる要因の一つとなっていた（しかし仮に列強が撤退すれば人々の生活が改善するというわけでもない）という複雑な状況のなかで、宣教師たちは、目の前の最も困難な日本人に寄り添うことに使命を見出した。こうした背景から、1870 年代の不安定な状況の日本に、女性も含む多くの宣教師が命の危険を冒し

て訪れることになるのである⁽⁶⁾。以下に、そのなかの二人の実践を事例として、そこでなされた活動と、その根底にある人間観を考察する。

Ⅱ. マルク・マリ・ド・ロ神父—外海の奇蹟

1人目はマルク＝マリ・ド・ロ神父(前出、図1)である。1868年に来日した、パリ外国宣教会に所属する宣教師である。

1) ド・ロ神父略伝

ド・ロ神父については、既に多くの評伝が出ているが、ここでは最も学術的な視点から整理された片岡弥吉『ある明治の福祉像—ド・ロ神父の生涯』に拠って、以下に来歴を概略する⁽⁷⁾。

ド・ロ神父は、1840年にフランスのノルマンディ地方のウォスロール村の貴族の家に生まれ、温かい家庭で両親や兄弟姉妹と育った。8歳のときに当代一流の教育者で学者と言われたデュパル一師(1802-78)がオルレアン司教になり聖十字架学院を設立したのを機に入学、やがて師の影響で神に仕える決心をする。オルレアンやパリの神学校で学び、1865年に神父として叙階、建築・医学・薬学・福祉などを勉強して伝道に備えていた。1867年にローマ経由で一時帰国したプティジャン司教の、印刷のできる神父という求めに応じるべく即座に印刷所で石版印刷術を体得、1868年に司教とともに来日する。長崎に上陸したのは、奇しくも、「浦上四番崩れ」の浦上キリシタン一村総流罪の太政官達の出た6月7日と言われている。

来日後は、長崎・横浜での印刷事業に尽力する傍ら、横浜や長崎における建築や社会福祉にも携わる。やがて、自身が執筆した聖教出版物(ド・ロ版)も出す。1879年以降は、長崎の出津地区の寒村外海における福祉・殖産事業・医療・土木建築といった、一村の生活全般にわたる救援に尽くした。来日から45年間、一度も帰国することなく、1914年に長崎で永眠する。

2) ド・ロ版印刷 — 「わかりやすさ」の追求

上述したようにド・ロ神父の来日の目的は、印刷事業を行うためであった。最初は長崎や横浜でプティジャン司教が主導していた教会の印刷事業を手伝って、プティジャン版の聖教出版物の刊行を進めたが、やがて自らも刊行物を出す。ド・ロ版印刷と呼ばれるものである。

片岡弥吉によると、ド・ロ版印刷には1877年に刊出した『知慧明ヶ乃道』『光福教導』『たつときゆかりしちやのこと』『1877 Praelectiones Linguae Latinae』と1878年に刊出した『オラシヨ並ニヲシヘ』と刊年不詳の『キリシタンの聖教』がある。片岡氏から指摘された特徴を要約すると、以下である。

- ①平仮名か片仮名に少量の漢字(漢字制限)
- ②石版よりも読みやすい活版を使用
- ③内容が専門的ではない

漢字制限と活版の利用についてのド・ロ神父の持論は『知慧明ヶ乃道』に述べられているが、片岡氏はここに「学問的レベルの低い当時の漁農民にも読書に親しませるため」「日本の近代文化を促進するため」などの意図を考察する⁽⁸⁾。

では実際に、ド・ロ神父記念館で公開する資料で、プティジャン版とド・ロ版とを比較して確かめてみる。この時期の翻訳文は概ね漢字仮名混じり文ではあったが、通常は、例えば図4のプティジャン版『煉獄説略』(1872)のような漢字が主体のものが多く、これに比べてド・ロ版は、仮名の割合が圧倒的に高く、しかも複数の書体を持つ平仮名よりも習得しやすい片仮名を用いている。図3はド・ロ版『オラシヨ並ニヲシヘ』(1878)であるが、確かにほぼ片仮名表記である。もちろん、この文字の配分の背景には、『煉獄説略』という理論書と『オラシヨ並ニヲシヘ』という教理と祈りを合わせた本という趣旨の違いもある。しかし、そもそも『オラシヨ並ニヲシヘ』のような、神学生のためでなく一般信者のために毎日読む出版物を提供したことこそが、ド・ロ版印刷の特徴とも言える。文字の読める聖職者が読みそれを信者が

聴くのではなく、信者自身が読むことが肝要なのである。ド・ロ神父は、日々の祈りを通して文字が読めなかった人を読めるようにする、といった民間教育の可能性を追求していたと考えられる。それゆえ、内容も啓蒙的である。例えば『オラシヨ並ニヲシヘ』には、次のような一節がある。

ヒモジキ人ニハタベモノヲ
カワキタル人ニノミモノヲ
ビンボウナル人ニハキモノヲバ
ヤドナキ人ニハヤドヤヲバ
ジュウナキ人ニハアガナイヲバ
ピョウ人ニハ カイホウヲ
死ニシ人ニソウレイヲ
カナフホド アタフルハ
カラダノセツジヒノシヨサ
(ド・ロ神父記念館蔵『オラシヨ並ニヲシヘ』参照)

片岡氏によると、上記は迫害時代から伝承してきた「慈悲の所作」(隣人愛のおきて) 14 カ条のうち肉体にかんする 7 つの実践である⁽⁹⁾。非常に平易に福音を説いているが、この一般信者に対する「わかりやすさ」の追求は、出津地区の外海という土地においてさらに発展することになる。

3) 外海における社会福祉活動(1879~1914)

外海でのド・ロ神父の社会貢献は伝記ほか多くの文献に既に繰り返されていることである⁽¹⁰⁾。救助院・養育院の設置、信者への教育、農業や漁業への技術の普及、パンやマカロニの生産などの殖産、診療所や産院の設置や医療技術の伝授を含む医療救護活動、ド・ロ壁で知られる建築など、極めて広範な社会貢献である。さらにそれは「女部屋」という女子修道院の開設(現「お告げのマリア修道会」の起源)、つまり日本人による教育・医療・福祉の自律的な運営にまで導く、長期的な可能性をも残すものであった。

こうした数々の事業のうち、印刷事業の「わか

りやすさ」の追求とのかかわりが深いものを、もう一点例示しておく。ド・ロ神父が 1870 年代後半(推定)に制作させたド・ロ版画と呼ばれる説教画である。一枚刷り版画で 10 幅揃。10 幅のうち聖人図など 5 幅は展示用、残りの 5 幅「善人の最期」「悪人の最期」「煉獄の魂の救い」「人類の復活と公審判」「地獄」を外海での絵解き説教(物語性の強い宗教的な絵画を用いた説教)に用いたことが確認されている。文字通り「貧者の聖書」である。この版画について最も詳しい報告をまとめた原聖は、教会の評伝類には絵解きに言及されるものはないので、説教の事実は当事者と一部の聖職者のみ認識されていた種類のものとして分析する⁽¹¹⁾。

この版画の最大の特徴は、日本人の信者にわかるように構図やイメージが工夫されていることである。「煉獄の魂の救い」(図 6)を例に、それを分析してみる。まず、この絵に描かれた人物は、装束も含めて日本人である。これは他の 4 幅でも共通している。ヴェールの代わりに白布をかけているのが特徴的である。また、日本で絵解きに用いていた図像とも共通点が多い。例えば、図 5 の「熊野観心十界曼荼羅」という、17 世紀以降に遊行廻国の尼が全国に広く流布させた代表的な絵解きの図像と比べてみる。ド・ロ版画の構図は上部から、①イエスキリストと天上世界→②煉獄の死者の魂を救済するための生者の祈り→③天国へいけない魂が苦しみを受ける煉獄と解釈できる。これは、「熊野観心十界曼荼羅」の、①四声という天上世界→②地獄からの亡者救済のための盆供養→③迷いから抜けられずに苦しむ六道の 3 分割に照応する。また、ド・ロ版画の上部には、金色の太陽と銀色の月の下に山が描かれている。これは図 5 の上部の日輪・月輪と山(この図では坂)とモチーフを共有している。山岳信仰との関わりの深い日本の宗教画では、曼荼羅も含めて顕著なモチーフである。なお、ド・ロ版画の構図の原型として原氏が位置づけるヴァスール神父が中国で刷らせた聖教版画を参照すると、構図はド・ロ版画と共通

であるが、そこには太陽と月と山はない⁽¹²⁾。この違いから、ド・ロ神父が日本人の信仰が中国由来の部分と土着の部分との融合であることを意識して版画を作成したことがうかがえる。これも日本人信者が「わかる」ための工夫である。

結局、ド・ロ神父の事業は、おおむね二つの段階を目指していたと言える。第一段階は、上記の「ヲシヘ」に書かれるように困窮している人を物的・精神的に援けること。第二段階は、困窮している人々の自立を援けることである。つまり全体としては、零細な土地で困窮していた人々が自分で生活を成り立たせ、ときに分け合いながら、自力で困窮から抜け出すことを目指した。不足しているものを富む者から与えられるだけではそこに従属するしかなく、根本的な誇りをえることも長期的に貧困を解消することもできない。それゆえ、庶民にも「わかる」ようにキリスト教の倫理を説き、文字や技術を教え、個人が自分の力で正直に生きていくのに必要なベースアップを行ったのだ。

Ⅲ. サント・マチルド修道女—子どもと女性の自立

こうしたド・ロ神父の草の根的な社会貢献のあり方と静かに共鳴していくのが、1870年代に次々に来日して、居留地を基軸に慈善活動に尽くした女子修道会である。2つ目の事例として、1872年に来日したサン・モール修道会のサント・マチルド修道女（前出、図2）の活動を紹介する。

1) サント・マチルド修道女略伝

現在日本語で参照できるもっとも詳しいマリールイズ・F・ド・スルタンによる評伝⁽¹³⁾に拠りながら、簡単にサント・マチルド修道女の生涯をまとめておく。

1814年に、ロレーヌ地方のヴォージュの名家に生まれる。敬虔なキリスト教信者の家長のもと代々続いた家系であった。両親と弟とともに普通

の幼少期を送っていたが、父親の決断でサン・モール会の寄宿学校に入ったことにより信仰心が育ち、やがて修道生活に召されていることを自覚する。例えば、地理の教科書の中の日本に関する記述を学術以上の興味を持って読んだとき、やがて日本に赴きそこで使命を果たすだろうと確信したというエピソードは、1872年に宿願の日本に到着したときの感動と併せて伝えられている⁽¹⁴⁾。

話が前後するが、修道生活を選んだサント・マチルド修道女は1832年に修道院での修練を始め、1834年に修道名をえたのち、フランス各地へ赴任、1852年にアジア宣教第二回派遣グループ責任者に任命される。マレーシアやシンガポールでの宣教ののち、1872年にプティジャン司教から来日を要請する手紙が届くと4名の修道女を率いて横浜に赴く。58歳のときである。

横浜や築地で、孤児院や養育院といった女性や子どもたちのための福祉に尽力し、病院や終末医療にも取り組んだ。また、ヨーロッパや東南アジア各地からの修道女の招へいにも尽くした。フランス政府の要請で日本の上流階層の子女のための有料の学校経営も行うが、既存の福祉活動の方針は揺らぐことなく、最後まで貧しい人々に最も心を砕き、1911年に日本で永眠する。

2) 子どもの養育・女性の教育

伝記のなかで、サント・マチルド修道女の仕事は、次のようにまとめられている。

ところで、マザー・マチルドの使徒活動は次の数語をもってまとめることができる。

1. 貧しい人々を愛した。
2. 与えられた、あるいは託されたすべての子どもたちを教え育てた。
3. 病人たちを救った。家庭訪問・病院訪問・薬の無償配布・修道院附属の小さな施療院(ホスピス)に受け入れた人々の世話を通して。
4. 高齢になってから特に、少女・婦人の教育

を通して、上流社会への福音宣教に携わった⁽¹⁵⁾。

簡にして要を得た要約である。1~4の順番も、サント・マチルド修道女のなかでの優先順位を的確に捉えている。順に確認していく。

サン・モール会の沿革に「横浜で修道女たちが先ず手がけた仕事は、孤児、捨子、困窮者の子どもたちを収容し、養育、教育することであった。」⁽¹⁶⁾とあるように、徹頭徹尾重視したのは貧しい子どもや困窮する女性への支援である。そもそもプティジャン司教がサン・モール会に来日要請をしたのも、子どもの養育と女性への教育のためであった。当時、それが最も日本で不足していたことの一つであったからである。

サン・モール会に続き多くの修道女会が来日した。その経緯は彼女たちにやや遅れて来日した男子修道会のマリア会が、次のように俯瞰している。「一方、パリ外国宣教会の司祭たちは霊的・物的援助をフランス本国に求めた。ドイツ帝国成立の翌年1872年(明治5)、幼きイエス会(ママ)(ニコラ・バレ)がパリ外国宣教会の招きで来日した。続いてジョファイユの幼きイエズス修道会が1877年(明治10)に来日した。西南戦争の翌年、1878年(明治11)にはシャルトル聖パウロ修道女会が来日した。明治政府は男子教育に重点を置いたが、女子教育まで手が回らなかった。そこでこれらの修道女会は女子教育並びに孤児院、病院の運営を始めた」⁽¹⁷⁾。要するに、緊急度が高いが男子修道会だけでは成し遂げられなかった仕事を、女子修道会が受け持ったということである。

現在のような男女共学の習慣はまだなかった。1872年の学制発布により、ようやく男子の教育課程の緒についた時期である。女子の教育機関は後回しで、そもそも女子が教育を受けることも一般的ではなかった。施設もスタッフもすべて不足していたのである。一方で、孤児や生活困窮者の子どもなどを養育する施設も必要で、そうした子ど

もたちを教育して篤実な道を歩ませ、再び貧困を繰り返させないことも急務だった。孤児院や養育院は男子修道会も運営していたが、女子の養育や支援は(その後の教育も含めて)女子が行うほうがスムーズであった。

女子修道会は、老人や生活困窮者への支援にも積極的だった。例えば、築地サン・モール会信者武宮マテオ氏は「費用は教会負担で、聖路加病院のそばに備前橋というのがあって、そこに住んでいる未信者の医者に頼み、教会の貧しい人々が病気になるたらそこへ行って診てもらおうようなこともありました。またサンモール会は小田原町(現築地四、五丁目)あたりにお年寄りを十人ばかり、今でいう老人ホームのような形でお世話をしていたこともありました」⁽¹⁸⁾と回想する。

結局、何らかの理由で自律的に生きることが厳しい状態にある人のために、物質的・精神的な援助を行うことが、女子修道会の求道の軸を成していた。なお、修道会は男女とも基本的には似通った活動をしていたので、連携もあったようである。例えば、上述のド・ロ神父は1871年にプティジャン司教から横浜に呼ばれるが、これはサン・モール会の宿舎を建設するためであった⁽¹⁹⁾。

3) 全体的な教育の動向とのかかわり

サン・モール会は1870年代から横浜や築地で孤児院や養育院とともに、外国人や子女のための有料の寄宿学校を私設していたが、やがてそれは日本政府の近代学校設立の流れのなかで、良家の子女のための私立学校へと展開していく。先ほどの引用で第4の点として挙げられたことである。これはマリア会が経営する暁星学園のような上流階層の子弟のための初等・中等学校経営と協働するような動きであり、やがて1900年代になると、孤児の養育や教育とは異なる趣旨の学校運営につながっていく。教会が経営する学校は日本におけるフランス語、ひいてはフランス勢力拡大に必要とされるという側面も持ったのである⁽²⁰⁾。

上流階層の子女の教育と孤児への教育との両立に葛藤を抱えながらも、修道女の意味が貫かれた様子を、スルタンは次のように述べる。

マザー・マチルドが、いかなる人も蔑まず、その熱誠が社会のあらゆる階級に向けられていたことは確かである。が、優先順位から言えば、その第一は明らかに貧しい人々であった。来日してからすでに20年間、横浜に住む恵まれた外国人家族の子女を対象にした寄宿学校をマザーが経営していたことは事実であるが、マザーが特別目をかけていたのは、貧しさゆえにマザーのもとに引き取られた子どもたちであった。(中略) マザーはこの子どもたちのことをいつも心に置き、この子どもたちのために働き、この子どもたちにキリスト教教育の霊的糧と、生きるための物質的糧を与えるため、思いつく限りの手段を講じていた⁽²¹⁾。

このように、サント・マチルド修道女は、徹頭徹尾、貧しい人に寄り添った。彼女も20世紀初頭のフランス国家という「全体」に属する個人であった。よって、第一義としている最も貧しい人々への教育・医療・福祉に特化できない状況はあった。しかし、その「全体」のなかで、すべての命を尊重し愛するという、個人ができる最善を尽くす努力は惜しまなかった。例えば、上の引用に続く部分には、彼女が貧しい子どもたちが「正直に働いて、まともに生きていかれるよう」、日本政府が規定している義務教育を終えた子どもに裁縫や刺繍ほか手仕事を身につけさせて自立した女性に育てたと書かれている⁽²²⁾。つまり、子どもたちが出自の貧困から抜け出す一歩を後押しした。「全体」の制約にあっても、個人のレベルで実現可能な最大限の人道支援を続けたことこそが、宣教師の活動が持った最大の価値なのである。

IV. 宣教師が運んだフランス―「憧れ」の諸相

以上、ド・ロ神父とサント・マチルド修道女の社会貢献の、ごく一部ではあるがとくに重要な点を紹介した。以下に、両者に共通する要素をまとめ、「憧れ」の諸相を考察する。

1) すべての人間の尊厳を保障するという発想

まず両者に共有されるのは、すべての人間の尊厳を保障するという発想である。女性も子どもも貧しい人も病む人も、誰もが意思を持った人間として生きる価値があるという、命の肯定である。またそこには、その命を養うために一人一人が必要な糧を自ら産出するという考え方も附随する。それも、窃盗や人身売買といった非人道的な手段によってではなく、富む者からの施しによってでもなく、生産することによってである。いかに微量であれ自分の力で生産することによって生きる喜びや誇りを見出し、意思をもつ存在として生きる。その結果、物質・精神ともに貧困や差別から抜け出す、という考え方である。

個人が自ら生活を保障していくところに本質的な人間の尊厳があるという発想。これが、フランスの宣教師たち(おそらくプロテスタントとも共有)が日本に運んできた「近代」である。

貧困や差別に対して心を痛め、自己や他者が少しづつでもそうした状況から抜け出すために具体的にできる支援を行うという発想は、仏教のような既存の信仰にももちろんあった。しかし、根本的に貧困の連鎖から自力で抜け出す支援を福祉としてすべての人に継続的に行うという形は、当時の日本人にとって新しい発想であったに違いない。とくに、貧困層のなかでも最も無力であった女性や子どもや病者にも生きる価値があり、他者を援ける力も持つのだという「発見」をもたらしたことは、多くの命の肯定につながった。宣教師の慈善事業は、一時的な施しではなく、個人の尊厳の回復と保障を目指した長期的な社会貢献だった。

2) 最も弱い存在に寄り添うことの実践

次に共有されるのが、尊厳を保障するための方法である。それは、最も弱い存在に寄り添うことである。歴史的に形成された根強い貧困や差別、社会の混乱のなかで、もはや自力で抜け出すことが不可能なほど泥沼化・無力化している存在（例えば孤児・捨て子、難病者、障がい者、被差別階層など）に対して、教育や医療を無償で提供する。いわば再出発の最初の一步を援ける活動である。

サン・モール会を含む女子修道会の第一義は、当時圧倒的に弱勢であった貧しい女性・子ども・老人への福祉を重点的に行うというものであった。また、長崎でド・ロ神父が尽くしたのも寒村で弾圧を受けていたキリシタン集落が自律的に生きるための支援であった。宣教師の始めた社会貢献はやがて各地で、貧困から自立した人々が弱者救済を担うところまで育った。外海の女性たちによる福祉集団「女部屋」はその典型である。

なお、最も弱い存在に寄り添うことは、容易なことではない。そのことに費やす労働に忍耐や精神力を有するだけでなく、弱者に対する想像を絶する社会の負の圧力とも向き合わねばならないからである。既得権益や当事者ではない人々からの抑圧や偏見や無関心に加えて、長年の貧困や差別のなかで疲弊し馴化している弱者自身の無気力や無知といった多層的な負の圧力は、意識のレベルでも無意識のレベルでも根強く存在した。

宣教師は、そうした圧力のなかで「誰かがやらなければならないことをただだまってやる。ただそれだけのために生きる」ことを非営利・非暴力で実践し、目の前の命を援けた。また、そこに喜びを見出した。ド・ロ神父とともに浦上十字会という女子修道会の育成にかかわった岩永マキの福祉活動について、片岡氏は次のように述べる。

うら若い身で流刑地の重労働に耐えぬいたのも、神とその教えに対して純粹の信頼をもちつづけたからであった。故郷に帰ってのち、

赤痢と天然痘のまっただ中に入りこんで救護活動にはげみ、やがて孤児たちのために一生をささげることになったのも、人間の尊さを知っていたからである。人に知られず、人に求めず、ただ黙々と孤児を育てるための労働に汗みどろになって働きつづける生活に安住して、彼女たちは自ら楽しく、よろこびに満ちた共同体をつくったのである⁽²³⁾。

ただ子どもを食べさせ、眠らせ、学ばせる。「ただ」といっても実はそれは大変な重労働なのだが、宣教師は、そのように他の生命に尽くすことの喜びを、身をもって明かす存在であった。また、人にはそうした幸福を追求する「自由」もあるという価値の存在証明でもあった。

3) 「近代」の予定調和的存在

近代の日本(日本の「近代」)は、全体としては、幕末の内戦、日清、日露戦争から太平洋戦争まで、戦争に明け暮れた時代であった。それは、科学知の発展とともにガスを灯し鉄道を敷き、兵力と国力を増大するという、世界の大きなうねりでもあった。

果たして国は富んだ。しかしその影で多くの犠牲者が出た。土地を失い、肉親を失い、生きる糧を失う。孤児や身寄りのない老人が増えた。また、そのように社会全体が貧困を極めると、既存の社会のなかで弱い立場にあった、女性・子ども・病者・被差別階級は、いっそう放置されていった。

宣教師が日本に運んだフランスは、そうした「近代」というシステムへの転換のなかで重症化し増大する社会的弱者（実際に欧米諸国でも既に露呈していた状況）を救済する博愛的な人間観であり、それを具現化する個人の在り方であった。

19世紀末にプロテスタントも含めたキリスト教会が主導した、すべての人間の尊厳を保障するために最も弱い者に寄り添うという実践に裏づけられた博愛的な人間観は、科学知主導の「近代」

に、おそらくは予定調和的に存在したものと言えるだろう。国家や政府などの「全体」の負の圧力のもとですら、宣教師個人は、最も弱い人々への草の根的な人道支援を黙って続ける「部分」であった。その「部分」は、科学知への探究とそれによる豊かさの志向に拍車をかける現代の私たちにも、問いかけを残す。後世にまで残されたこの問いの重さが、「憧れ」の第3の相である。

結論

本報告で指摘した「フランスへの憧れ」は霊的な次元のものである。したがって、その度合いも個人の内面に委なつたものである。形象化しにくいゆえに、料理・服飾・文芸などにおいて形成された「憧れ」ほどには、明確に規定できない。しかし、その人間観は、教育・医療・福祉の各方面で現在にいたるまで継承された。しかもそれは、赤十字・NGO・NPOといった、宗教も政府も越えた共同体のなかにも息づいた。そうした継承者が、「憧れ」が確かに存在することを明かしている。

今後の課題は、この「憧れ」が継承された経緯と現状を跡づけることである。とくに、近代日本のフランス宣教師の草の根的实践が、同じフランス系の思想から影響を受けた同時代の自由民権運動や同時期のプロテスタントの活動との間にとどのような協働関係を持ちながら現在にいたったのかという観点は、極めて大きな課題として、探究していかなければならないものである。

注

- (1) 主に参照したのは、以下のものである。
- ①『マリア会日本管区百年のあゆみ・歴史編』マリア会日本管区100年史編纂委員会、1999年。
 - ②パリ外国宣教会編(松村菅和/女子カルメル修道会共訳)『パリ外国宣教会年次報告』1～5、聖母の騎士社、1996～2000年。
 - ③渋川久子・島田恒子『信仰と教育と サン・モール修道会 東京百年の歩み』評論社、1981

年。

- ④『いのちの水の流れるままに: ショファイユの幼きイエズス修道会日本管区130年の歩み、1877-2007』ショファイユの幼きイエズス修道会日本管区本部、2007年。
 - ⑤マリールイズ・F・ド・スルタン(島田恒子訳)『ひとつぶの麦のように 最初の来日修道女『マザー・マチルドの生涯』より』横浜雙葉学園創立百周年実行委員会編、2000年。
 - ⑥上記の前編、同上、2011年。
 - ⑦片岡弥吉『ある明治の福祉像 ド・ロ神父の生涯』NHKブックス276、1977年。
- (2) 宣教師の琉球滞在とその経緯については、クリスチャン・ポラック「日仏交流略史」(西野嘉章+クリスティアン・ポラック編『維新とフランス——日仏学術交流の黎明』東京大学総合研究博物館、2009年、pp.50～60所収)、Francisque Marnas, La "religion de Jésus" ressuscitée au Japon dans la seconde moitié du XIX e siècle, Paris, Delhomme et Briguet, 1896。(フランシスク・マルナス [平野桂一郎訳]『日本キリスト教復活史』みすず書房、1985年)、注(1)－②前掲書1巻の1858年以前の報告などを参照。
- (3) 注(1)－②前掲書1巻、p.13。
- (4) メルメ・カシオン神父は日仏修好通商条約締結のフランス特命全権使節として派遣されたジャン＝バティスト・ルイ・グロ男爵 Jean-Baptiste Louis Gros (1793-1870)の通訳を務めたのち、函館に上陸しフランス語の学校を開いて宣教に奔走、のちに江戸に移り初代フランス公使ギュスターヴ・ドゥシエース・ド・ベルクール Gustave Duchesne, Prince de Bellecourt (1817-1881)の通訳を務めた。一時帰国ののちに、1864年に日本を再訪、第二代フランス公使レオン・ロッシュ Léon Roches (1809-1900)の通訳も務める。また、ジラル神父は、1860年に当時駐日総領事であったベルクールの通訳官を務めた。
- (5) 例えば太田淑子「国づくりの中での宗教・キリスト教」(『日本の教会の宣教の光と影 キリシタン時代からの宣教の歴史を振り返る』所収、サンパウロ、2003年、pp.83～105)参照。
- (6) マリア会の沿革には「当時、宣教師が極東に向かうことは勇気が必要だった。それまで中国や韓国、ベトナムなどで多くの宣教師が殉教し、パリ外国宣教会の神学校は「殉教専門学校」とも呼ばれたこともあった。交通手段が発達していなかった時代、情報不足からくる誤解もあったが欧米諸国は都合のよい解釈をし、極東諸国の文化を過小評価する傾向にあった」(注(1))

—①前掲書、p.25)とある。また、サン・モール会では、来日から3年半で3名の修道女が落命した(注(1) —③前掲書、p.32参照)。

(7) 注(1) —⑦前掲書。

(8) 同上、pp.55—56を参照。引用はp.55。

(9) 同上、pp.60—62を参照。マタイによる福音書25—31—41に由来すると思われる。

(10) 例えば、以下。

・二村悟「長崎市・旧出津救助院授産場での製茶作業」『日本建築学会技術報告集』13巻第25号、2007年

・矢野道子「ド・ロ神父の事業——建築・移住開拓について」『生活文化』37号、2000年3月

・同「ド・ロ神父の事業——救助院での活動(1)」同上39号、2001年3月

・同「ド・ロ神父の事業——救助院での活動(2)」同上43号、2003年3月

・同「ド・ロ神父の殖産・福祉活動——素麺とカンコロ」同上44号、2003年9月

(11) 原聖「日本に入ったキリスト教絵解き」『キリシタン文化と日欧交流』所収、勉誠出版、2009年11月、p.196参照。論者の現地調査でも、外海の在住者と教会関係者には、絵解きの事実が比較的知られていることは確認できた。

(12) ヴァスール神父の図については、注(11)の原氏の論文で参照できる。なお、日本の絵解

き図像とのより詳細な比較は、論者が刊行予定の近著のなかで提示する準備を進めている。

(13) 注(1) —⑤⑥前掲書参照。

(14) 注(1) —⑥前掲書、pp.41—42。

(15) 注(1) —⑤前掲書、p.111。

(16) 注(1) —③前掲書、p.24。

(17) 注(1) —①前掲書、p.2。

(18) 『つきじ 献堂百周年記念号』1978年、p.42。

(19) 森禮子『神父ド・ロの冒険』、教文館、2000年、pp.67—75参照。

(20) この点は、近刊予定の藤巻和宏・井田太郎編『近代学問の起源と編成』所収の拙論「近代日本のフランス語教育の起源と編成—宣教師の果たした役割—」(勉誠出版)のなかで、フランス語教育の導入の諸相との関わりから論じた。

(21) 注(1) —⑤前掲書、pp.112—113。

(22) 同上、p.113。

(23) 注(1) —⑦前掲書、p.85。

【図の出典】

図1：ド・ロ神父記念館提供

図2：注(1) —⑤前掲書口絵

図3：ド・ロ神父記念館提供(西岡撮影)

図4：同上

図5：小栗栖健治『熊野観心十界曼荼羅』岩田書院、2011年

図6：ド・ロ神父記念館提供

図1：ド・ロ神父(晩年)



図2：サント・マチルド修道女(晩年)



図3：ド・ロ版『オラシヨ並ニヲシヘ』（1878）



図4：プティジャン版『煉獄説略』（1872）

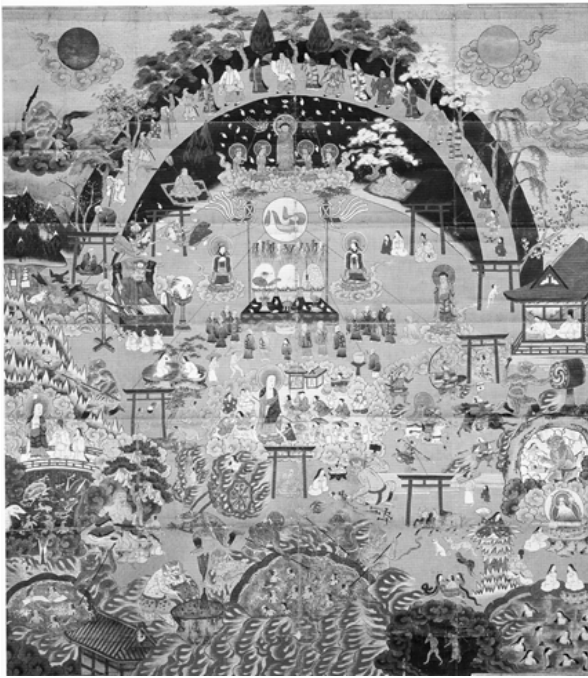


図5 熊野観心十界曼荼羅（大円寺本・18世紀）



図6：ド・ロ版画「煉獄と魂の救い」（19世紀）